

アルマディアス
英雄伝

4

The Heroic Saga of Almadianos

高見梁川

Takami Ryousen

Illustration: 長浜めぐみ



主な登場人物

クラッツ

本編の主人公。18歳。
驚異的な身体能力を有する「脳筋」。素直な性格の好青年。



ベルンスト

悠久の時を生きる大魔導師。他者を寄せつけない
圧倒的な力を持つ。とある目的で転生を決意する。



フリッガ

ラップランド王国の王妹。19歳。
グリフォンを駆り自ら前線で戦つ。通称「白髪戦乙女」。



フェルベル

イエルムガンド王国の第一王女。20歳。
妹とは対照的に大人しく控え目。見る人に優しい印象を与える。



アルベルト

フェルベルの夫。王国を代表する大貴族。
次代の権力を狙い暗躍する。



コーネリア

クラッツの義理の姉。19歳。母譲りの美貌の持ち主。
貧乳なのを気にしている。



ルナリア

イエルムガンド王国の第二王女。18歳。
明るく積極的な美少女。武術にも優れ、庶民から人気がある。



ロスベルグ

イエルムガンド王国の近衛騎士団長。
「王国の剣」と呼ばれる実力者。ルナリアの剣の師匠でもある。



スクルデ

アイスガルド帝国南方軍（第二軍）の軍団長。
王族の血を引く美女ながら「狂姫」と恐れられる戦闘狂。



ギンター

アイスガルド帝国東方軍（第一軍）の軍団長。
かつてロスベルグと引き分けた帝国最強の武人。





第一章

赤き狩獵者

The Heroic Saga of Almadianos

アルマデアス
英雄伝

目次 Contents

登場人物紹介	002
第一章 赤き狩獵者	005
第二章 黄昏の王女	091
第三章 勝利への執念	203

イエラムガンド王国に反旗を翻したストラスブル侯アルベルトを討つべく、討伐軍はかつてアルベルトの右腕と目されていたラグランジュ侯爵を筆頭に、およそ一万二千の兵を動員して意気揚々と王都を出発した。

彼らはイエラムガンド王国の主流派ではないが、稀に見る大軍であった。

対するアルベルトの軍は、正規軍六千に傭兵二千の計八千。

攻者三倍の法則には届かないが、謀反人の軍という敵の心理的重圧を考えれば十分に倒し得る、とラグランジュは考えていた。

「――落ちぶれたものだ、アルベルト」

本来一族を結集すれば一万を超える兵を動員できるはずが、わずか六千にとどまったのは、アルベルトの親族たちに見限られたからだ。

確かに王宮でひと際存在感を放つ男ではあったが、戦において何ひとつ実績のないアルベルトに一族の命運を賭けるのは、あまりにリスクが大きすぎる。

そんなことも理解できないほど愚かではなかったはずだが……貧すれば鈍すとはこのことだろうか。

「まあいい、我が栄華の礎になってくれるのならな」

ラグランジュ侯の揃えた四千という兵力は、アルベルトには及ばないものの十分に破格と言えた。

さらにクルーゾー伯爵が千、ヴィルバン男爵が五百、そしてラグランジュの一族衆から、レーヌ子爵とフィヨン伯爵が合わせて一千五百を率いて参戦している。

これに加えてルクレール將軍が率いる王国軍が五千。ルクレールは手堅く粘り強い用兵に定評のある謹厳実直な男だった。

肥沃で生産力の高いストラスブル領は、恩賞として非常に魅力のある土地で、ラグランジュが先陣と決まったことに齒ぎしりする貴族も多い。

肩身の狭い裏切り者から一転、名誉も恩賞も将来の希望も、すべて掌中に収める可能性を掴み取ったラグランジュは、やはり只者ではなかった。

「壮観ですな、ラグランジュ様」

ヴィルバン男爵は初めて見る万余の軍勢に興奮を隠せずにいる。

アースガルド帝国の脅威が囁かれているとはいえ、長く大規模な紛争から遠ざかっているイエラムガンド王国にとって、これほどの実戦部隊が動員されたのはここ十年で初めてだ。例外があるとすれば、新年の儀礼的な閱兵式くらいだろう。

「油断はめさるな？ ヴィルバン殿。勝利してこそ我が浮かぶ瀬もあるのですからな」

「む、無論、全力であい務めますとも！」

この戦いでの手柄がその先に続く恩賞を保証してくれるのである。
もちろんヴィルパンもラグランジュも、手心を加えるつもりは毛頭ない。

ただ、彼らがすでに勝利は確定したものと樂觀的に捉えていることだけが問題だった。

味方に漂う功名心に逸る気持ちと、敗北など考えてもいない弛緩した空氣に、ルクレールは職業軍人として神経を尖らせていた。

「……ストラスブル侯を甘く見すぎだ」

国境での小規模な紛争を数多く経験しているルクレールは、敵地での戦闘がいかに困難かを熟知している。地の利というものはそれだけで無視できない力を発揮するのだ。

兵力差が一・五倍にすぎないにもかかわらず勝利を確信する楽天ぶりが、ルクレールには信じられなかった。

そうした慎重な性格こそが、今回の討伐にルクレールが拔擢された、もうひとつの理由ではあるのだが。

「警戒を怠るな！ 斥候を派遣して索敵を強化しろっ！」

「はっ！」

兵力が大きく、そして味方の士気が高いことは悪いことではない。

戦力差を覆す奇襲や、離間工作のような謀略を許さなければ、自然とこちらに有利な戦いができるだろう。

ルクレールは、不気味に沈黙したまま擾乱攻撃すらしないストラスブル軍に、違和感と疑念を隠せずにいた。

一方、ストラスブル侯爵軍が手をこまねいて沈黙していたのにはもちろん事情があった。
むしろ想定外の極みと言ってよい。

こんな事態になるなど、数カ月前のアルベルトは夢想だにできなかった。まさに見込み違いの連続である。

期待していた親族には見捨てられ、王国に反旗を翻すことに自軍の兵たちも消極的で、士気の低下は目を覆うばかりだった。

下手に出撃して負けようものなら、その瞬間にも軍は瓦解するだろう。
何が何でも最初の戦闘に勝たなくてはならない。

その確実な勝利の機会を待っているうちに時は過ぎ、とうとう城まで接近を許してしまったというわけだ。

これは、戦闘という不確定要素に命を懸けることのできない臆病な指揮官が、往々にして起こす喜劇的な思考の停止であった。

「――閣下、このまま何の工夫もなく籠城戦となれば、味方の士気もそう長くは持ちませんぞ！」

伶俐な知性を感じさせる壮年の男が噛みつくように言った。

「そんなことはわかっている！ それより間違ひなく勝てる策を出せ！」

アルベルトに才を見出され、ストラスブル侯爵軍の軍師となったベネディクトは、内心の怒りを抑えて大きく頭を振る。

「戦に絶対という言葉はありません。だから失敗したときに備えて二の手、三の手と用意しておくと、何度も言ったではありませんか！」

ベネディクトは別働隊による迂回奇襲や、領民の村を焼き討ちにする焦土戦術など、いくつもの策をアルベルトに献策していた。

その度に城の兵力が少なくなるのは問題だの、領民を犠牲にするのは外間が悪いだのと注文をつけて拒否したのがアルベルトである。

まさに実戦経験のない弱みが出たと言えた。

王国に討伐されようというこの期に及んで、まだ戦後の政治に気を使うことがそもそもナンセンスだ。

そうした余裕の思考は勝てる算段がついている側がするものだろう。

「こうなつては忠誠心の高い兵士を集めて、隙を狙って一か八か出撃するしかありません」

「もつとほかに手はないのか？ あの野蛮人はたった一人でアースガルド軍を撃退したのだぞ！」

「あんな化け物と一緒にしないでください！」

たった一人で一個軍団に匹敵するような活躍を期待されても、ベネディクトにはどうすることもできない。比較する対象がそもそも間違っている。

「すべてが遅すぎます。保険に手はつけないのでしょうか？」

アルベルトは心から嫌そうに顔をしかめて、渋々ベネディクトに頷いた。ここで反対すれば、望まぬ展開になるとわかったからである。

「よいか、負けることは許さん。必ず勝て！」

余裕のない声で、アルベルトは吠えるように告げた。

「わかっています。ここで負けては、私もいったい何のために働いてきたか、わからなくなりますのでね」

望めば王国軍でも相応の地位を得られたベネディクトが、榮達を振り切りアルベルトの軍師に収まったのは、心密かにフェルペルーに懸想していたからだ。

フェルペルーはアルベルトの妻で、イエラムガンド王国の第一王女。

あまりに違う身分の差は承知している。だから想いを成就させようなどとは考えていない。ただ傍で彼女を見守っているだけでよかった。

いずれ女王としてこの国に君臨するであろう彼女のために、自分の力を少しでも役立たせられれば。

そんな一途な思いとともに、ベネディクトはストラスブル侯爵軍を鍛え上げてきた。

おかげでストラスブル軍は精強として王国に名を馳せるほどになった。だが、まさかアルベルトが失脚して王国に反旗を翻すことなど想像すらしていなかった。

(ここで負ければフェルベル様は……)

虜囚の辱めを受けるだけでなく、下手をすれば恩賞として、討伐した貴族どもに下げ渡される可能性もある。

純情を貫き、ベネディクトが生涯を懸けたフェルベルにそんな惨めな真似をさせられるはずがない。

(それにしてもアルベルトめ……フェルベル様の夫でありながら、なんと無能で度胸のないことか！)

夫として妻に幸せを与えることができない無力な男。

ベネディクトは静かに、フェルベルとアルベルトを娶わせた運命を呪った。

結局ルクレールが警戒していた襲撃は一度もなく、討伐軍は無傷のままついにストラスブル城へと到着した。

あくまでも結果的にはあるが、敵の弱腰の対応はラグランジュたちが率いる貴族軍に慢心を引き起こした。

「敵は逆賊じゃ！ 容赦なく殺せ！」

「手柄を立てれば恩賞は思いのままぞ！」

手柄と報奨を皮算用して好戦的な討伐軍に引き換え、ストラスブル軍の動きは鈍い。

殺されたくないからやむなく戦ってはいるが、心情的に同胞であるイエラムガンド国民を殺したくないのである。

要害であるストラスブル城にいるからこそかうじて戦意を保っているが、攻撃があと三日も続けば、脱落者が続出するのは火を見るより明らかだった。

「落ちつけ、この程度で我が城は落ちません！」

そんな状態でもなお、ベネディクトが精魂込めて鍛え上げたストラスブル軍の練度だけは本物だった。

攻城が始まるや、幾度にもわたる討伐軍の波状攻撃を撃退し、少なくとも損害を与えることに成功した。

危なげないその鉄壁の防御は、手堅い用兵に定評のあるルクレールが感嘆の声を上げたほどである。

しかし籠城戦の鉄則で、撃退は勝利ではない、というものがある。

敵の攻撃を防いでいるだけでは決して味方の士気は上がらない。こちらから攻撃して主導権を握ってこそ勝利と呼べるのだ。

いくら善戦しても、勝てるという希望がなければ兵は戦えないのだ。

そうした意味で、ストラスブル軍の士気は早くも崩壊の目前に迫っていた。

（くそっ……まだか？ このままでは……）

冷静に籠城戦の指揮を取り続けるベネディクトの背中を冷や汗が流れ始めたとき、ついにラグランジュたち貴族軍は攻勢を諦めた。

後退していく敵軍の追撃のためにベネディクトはすばやく右手を振った。

いつの世でも後退して背を向ける瞬間が、軍隊にとってもっとも危険な瞬間なのだ。

——そのときである。

「押し出せ」

待機していたルクレールの王国正規軍が、損耗する貴族軍を庇うように満を持して攻撃に参加したのだ。

望むところだとベネディクトは覚悟を決めた。

ルクレールは守りに定評のある將軍で、彼の軍が温存されたまま反撃に転じるのはリスクが高すぎたのだ。

ここが勝負どころとばかりにベネディクトは吼えた。

「奴らの相手は俺に任せろ！ さあ、傭兵ども！ いくらでも賞金を出してやるから逃げる兵どもをぶち殺せ！」

撤退するラグランジュほかの貴族軍の背に食らいつかせる形で傭兵部隊を放ち、ベネディクト自身は整然と前進してくる正規軍に向き直った。

ようやく要のルクレールが動いた。

貴族軍に劣勢でなお耐えるだけの粘りは無い。ルクレール率いる正規軍さえ倒すことができる。れば、ラグランジュなどいくらでもあしらうことができる。

ベネディクトは最後の予備戦力を投入して正面戦力を強化した。

だがルクレールもさるもの、これを決然と受け止める。

「恐れるな！ 正義は我にあり！」

「おおおおおおっ！」

王国を守護する正規軍の士気は天を衝くほどに高い。

予備を投入したにもかかわらず、ここ数日の戦闘で疲れていたストラスブル軍は、これまで消耗を避け体力を温存してきた王国正規軍に押されまくった。

「押し返せ！」

そう言いつつも、予想外の苦戦にベネディクトは決断を迫られていた。

本来であれば正規軍を消耗の泥沼に引き込んだ上で、切り札の投入の機会を窺うつもりであった。

しかしルクレール率いる正規軍の圧力はベネディクトの予想すら上回っている。

さらに味方の士気の低下が深刻で、ベネディクトの的確な指揮がなければ、とうの昔に防衛線は崩壊していただろう。

（もはやここは賭けに……出るしかないっ！）

せめて敵の補給線を断てていれば、あるいはもっと早い段階で敵に消耗を強いることができれば。

そんな悔悟をすべて腹に吞み込んで、ベネディクトは副官を呼びつけた。

「勝つ必要はない。ただ耐えろ。俺が出る！」

「なんだ……城門が開く？ 降伏でもするつもりか？」

言葉とは裏腹にルクレールの表情は険しい。

彼の長年の経験と野性の勘が、尋常ならざる気配が城門から放たれていることを知らせていた。

すでにルクレールの兵の一部は城壁内部に達して白兵戦を繰り広げている。

あと数時間もあれば城壁を完全に掌握することが可能であろう。

にもかかわらず城壁を放置して出撃しようとする——ということは、これがストラスブル軍の切り札に違いなかった。

「続けええええええええええっ！」

ベネディクトの咆哮とともに矢のような速度で飛び出したのは、およそ二メートル半ほどの巨大な甲冑に身を包んだ一団である。

アースガルドの魔導装騎兵の技術を一部供与されて、ストラスブルが独自に作り上げた魔導自動甲冑アルフォンス。

その機動力、突進力、防御力は従来の重装騎兵を遥かに凌駕していた。

ほんの一瞬の間に、まるで象に踏みつぶされたかのように、前線の兵が人の形ではない肉塊と化した。

アルフォンスのあまりの衝撃力に、正規軍にも動揺が走る。

ラップランドでアースガルド軍と戦ったクラッツを除き、イエラムガント王国で魔導装騎兵ケイオスを見た者はいないのだ。

未知の兵器により突然蹂躪されて混乱しない兵はいない。

「將軍の首以外、目もくれるな！」

先頭を駆けるベネディクトは、雑兵には目もくれず、ただ前進することを優先した。

実はアルフォンスの数はまだ少なく、稼働時間も非常に短い。

ベネディクトは、なんとしても短時間の戦闘で目に見える戦果を挙げなければならなかった。そしてできることならその戦果は、王国正規軍であるルクレールからが望ましい。

だからこそベネディクトは、ルクレールが前線に出るまで切り札の投入を待った。

王国に喧嘩^{けんか}を売っている以上、勝てるかもしれないという希望を兵に与えなくては、遠からずストラスブル軍は自壊してしまうからだ。

——あと少し。

ルクレールが指揮を執る本陣が、ベネディクトの目前に迫っていた。

アルフォンスの損耗率は現時点でおよそ三割。撃破されたもの、故障して動かなくなったものもあるが、戦力としてはまだまだ十分である。

「覚悟めされよ！ ルクレール將軍！」

百騎以上のアルフォンスが、怒涛^{どたう}の勢いで敵本陣に乱入する様は圧巻であった。その津波のような進撃は、見る者にベネディクトの勝利を確信させるに十分だった。

——しかしそこにベネディクトが追い求めるルクレールの姿はなかった。

いや、それどころか護衛の兵の姿すらない。

もぬけの空^{から}である。

あまりに整然としたその光景に、ベネディクトは嵌^はめられたのが自分であることを知った。

「しまった！ まさかここまで奴の読みの内か！」

「射線固定」

「魔力集中よし」

「増幅魔導媒介^{ばいかい}、起動」

「……残念だったな。切り札を用意していたのはそちらだけではない」

切り札の読み合いに勝利したルクレールはニヤリと不敵^{ふてく}に嗤^{わら}った。

後方で準備されていた、妖魔の素材を用いて魔導の威力を画期的に増幅する新技術を、満を持^じして投入する。

王国魔導院の指導を得た魔導兵が、魔法陣とともに練^ねり上げた莫大^{ばくだい}な魔力を解き放った。

「——炎王^{スルトレーヴァティン}の魔剣」

極限まで圧縮された高温の煌^{きら}めきが、奔流^{ほんりゅう}となって、破格の魔導防御力を誇るアルフォンスに襲いかかった。

「魔導結界全開っ！」

「だ、だめです！ 防ぎきれません！」

アルフォンスの耐熱能力がcaろうじて何秒かほどの時間を稼いだものの、あまりの高熱に耐えきれずどんどん溶け落ちていく。

多くの資金と労力をかけた切り札が為す術^{すべ}もなく失われていくのを、ベネディクトは呆然^{ぼうぜん}と眺めるしかなかった。

「——申し訳ありません。フェルベルー様」

何の見返りもいらなかった。ただフェルベルーが幸せであれば、それだけで良かった。

もはやベネディクトに彼女を守る術はない。

命尽きるそのときまで、せめて彼女のために祈ろう。

どうせ残された兵力で、この戦いに勝利することなどありえないのだから。

「敵の切り札は破った。一気に押し切るぞ！」

今こそ戦いの流れが完全にこちらに傾いたことをルクレールは確信した。

あとはその流れに乗って攻めるだけで、ストラスブルは落ちる。

傭兵の追撃を受けていた貴族軍も、そろそろ態勢を整え終わるころだ。

彼の予想はある意味では正しく、ある意味で間違っていた。

アルベルトのみが相手であれば、勝敗は確かにこの時点で決したのだが――。

「――なんてつまらないの。この程度の雑魚にさえ勝つことができないなんて」

ベネディクトが予想できなかったそれは、アルベルトがどうしても使いたくなかった保険であつた。

狂姫スクルデ率いる赤色獵兵団が、まるで散歩にでも出かけるように、無造作に動き出したのである。

「あの馬鹿、すでに国を売り渡していたか！」

大陸にその名を知られた狂姫の赤備え。

アースガルド帝国でも一、二を争う戦闘狂スクルデ率いる赤色獵兵団が、こともあろうにストラスブル城から現れたことに、ルクレールは事態を正しく洞察した。

あの劣勢でもアルベルトが強気だったのは、背後にアースガルド帝国という後ろ盾があつたからか。

一時は王国を背負う立場にありながら、売国とはなんとという破廉恥な真似を！

普段は喜怒哀楽をあまり表に出さないルクレールが、犬歯を剥き出しにして赫怒した。

王国軍の将として、祖国への忠誠を誓うルクレールには、許し難い以前に考えることすら不可能な裏切りである。

なんとしてもここで食い止めなければならぬ。

アルベルトがアースガルドに降ったという衝撃が、イエラムガンド全土に波及する前に、速やかに彼を討伐するべきであつた。

（だが……相手はあの狂姫……）

ルクレールは決して無謀な将ではない。だからこそ彼女と、赤い鎧で身を固めた赤色獵兵団の尋常でない戦力を、気の塊として知覚することができた。

噂は虚言などではなく、あの五千程度の戦力は討伐軍一万二千を上回るだろう。ルクレールの目にも見事な統率ぶりであつた。

肅然としながら、静かな自信に満ち、旺盛な戦意を表に出さないだけの抑制が利いている。
あの王国の剣ロズベルグにすら、果たしてこれほどの采配は振れるかどうか……。

「なあテオドルよ」

ルクレールは平騎士のころからの付き合いになる年長の副官に尋ねた。

「……貧乏くじを引いてくれるか？」

「何を言ってるんです！ あの狂姫を相手にできるなんて武人の誉というものでしょう」

「せっかくの美人と斬り結ぶのはもったいないのだがなあ」

「美人だからこそ嫉が必要でしょうや」

どちらからともなく二人はニヤリと笑う。

「男が美女と踊るのに命を懸けるのはそう悪いことではないな」

「ええ、まさに男の見せどころというやつで」

表情を引き締めたルクレールは深く息を吸い込むと、割れんばかりに声を張り上げた。

「ラグランジュ殿たちに逃げよと伝えよ。我らはここで狂姫と雌雄を決するとな」

一度敗退した軍が、再び士気を取り戻すのは容易ではない。スクルデの登場に驚愕している状態では特にそうだ。

ルクレールはもはやラグランジュたちが戦力にはならぬと判断した。

ならばここを逃れて後日の戦力となることを期すべきである。

命を捨てるのは自分たちだけでいい。

ルクレールの集団が高い戦意を持って、味方の盾となろうとしているのを、スクルデは遠目に認めた。

「どうしてなかなかの男がおるではないか。あのアルベルトとかいう繊弱者よりよほど肝が据わっておるわ」

楽しそうにスクルデは嗤う。

ルクレールが敵としてどれほどのものか、まるでワインの味を吟味するかのようにスクルデは見つめた。

赤色獵兵団ほどではないが、敵兵たちは恐怖を抑えて覚悟を固めている。

兵に死を覚悟させることのできる指揮官は少ない。

王国正規軍を率いるルクレールという男が、高い信頼を得る能力と人格を備えていることはすぐに見て取れた。

「けれど——それだけでは足りないの」

歌うように、舞うように、スクルデはゆっくりと髪をかき上げ、朗々たる美声を響かせる。
美しい金髪が陽光に煌めき、どこか神秘的な現実離れた違和感を抱かせる光景であった。
だがその本質は、敵の命を弄ぶ魔女の遊戯でしかない。

ルクレールが敵としてどの程度か見定め終えると、スクルデはゾツとするような酷薄な笑みを浮かべる。

「前菜とするには及第点かしら？　少し物足りないけど、そこは気力で補いなさいな」

ルクレールたちの決死の覚悟にも満足は得られない。

スクルデにとって、すべては戦って楽しい相手かどうか。

それが人生でもっとも大切な基準なのだから。

「さあ、踊るわよ！　ついてきなさい」

ルクレールは事ここにいたっても、勝利の可能性がゼロだとは思っていないかった。

先ほどの、アルフォンスを一撃で潰滅させた炎王の魔剣スルトレーヴァテイルの威力は本物である。この新魔導の破壊力はいかに赤色獵兵団レッドジャガーとて無視できぬはずだった。

「無敵の相手など存在せぬ。落ち着いて受け止めることに専念せよ」

「おおおおおおおっ！」

自らの気力を奮い立たせるように、兵たちがルクレールに応えて咆哮した。

数はほぼ同数である。相手もまた同じ人間であり、首を落とせば死ぬのだ。

だが、あらゆる意味で赤色獵兵団レッドジャガーは同じ人間のカテゴリーを逸脱していた。

解き放たれた矢のように疾駆する赤色獵兵団レッドジャガーの先鋒を、イエルムガンド正規軍は重厚な方陣

で受け止めた。

「突けええええええええええええええええいっ！」

一糸乱れぬ統制のとれた動きで、先頭の槍兵が腰を落として赤色獵兵団レッドジャガーに向かって思い切り槍を突き上げる。

訓練通りに槍は過たず敵兵の胸へと吸い込まれていった。

猛烈な速度で突進する赤色獵兵団レッドジャガーはその槍を避けることができない。

いかに強固な鎧でも、これほど速度がついてしまつては串刺しを免れないはずであった。ところが……。

——ゴスッ！

鈍い衝撃音とともに、槍どころか槍を突き出したイエルムガンド兵までもが後方へと吹き飛んだ。

その衝撃は後ろに控えていた味方を何列も巻き込んで、前衛はたちまち大混乱に陥る。

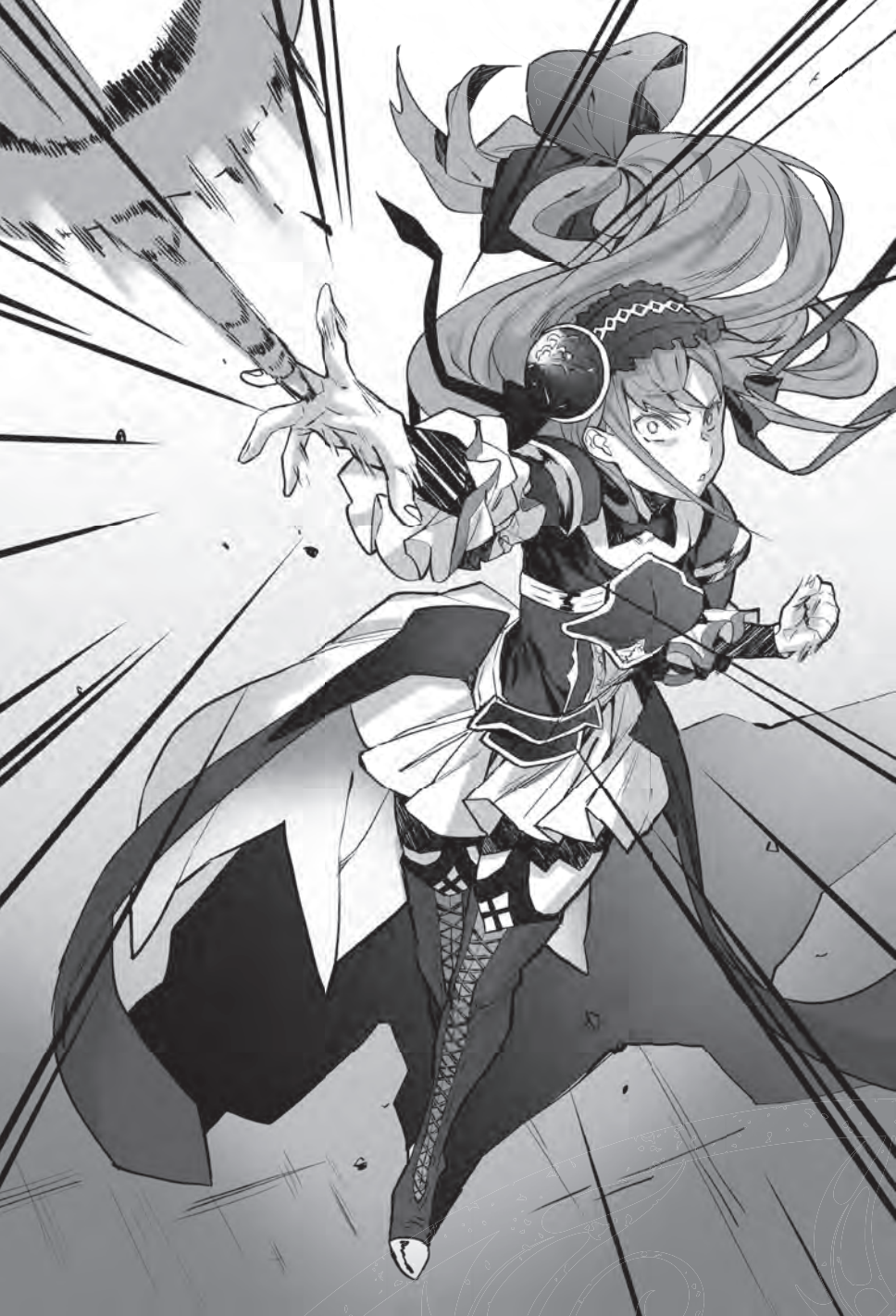
「な、なんだあれは？」

ルクレールは敵の先鋒を凝視した。

よく見れば赤色獵兵団レッドジャガーの装備する鎧が、薄く紅い光を帯びている。

おそらくはあの光こそが槍を弾き返したモノの正体であろう。

その魔力量と能力は、ストラスブル軍のアルフォンスをも上回っていた。



「まさか——これが、これがオリジナルなのか！」

「いやだわ。あんなおもちゃと一緒にしないでくれる？」

不機嫌そうに顔をしかめると、スクルデは槍を投擲した。

無造作に投げられたその槍は、十人以上のイエラムガンド兵を貫き、ルクレールの頬に一筋の傷をつけてそのまま宙へと消える。

赤い血が頬から顎を伝ってポタリと落ちるのを、ルクレールは震えながら見た。

「な、なんという力だ……」

十人もの兵を貫いてなお、遙か彼方まで飛んでいく槍。

いったいどれほどの膂力があればそんなことができるのか、見当もつかなかった。

スクルデほどではないが、部下の赤色獵兵団も膂力や防御力が高く、平凡なイエラムガンド兵では到底及ばない。

味方の攻撃が通用しないことほど士気を失わせるものはなかった。

混乱する前衛から恐慌が全軍に広がるうとしたそのとき、ルクレールは決然として叫んだ。

「退くな！ 忠勇なる我が兵よ、お前らの命、俺にくれ！」

「狂姫スクルデにイエラムガンド兵の功を見せつけるのは今ぞ！」

副官のテオドールがルクレールに続いて鼓舞の声を上げる。

それだけでは軍の崩壊は避けられなかったかもしれないが、ルクレールとテオドールは自ら

最前線へとその身を投げ出し、吶喊した。

指揮官が陣頭指揮を執ることで、崩壊寸前のイエラムガンド軍はかろうじて組織的戦闘を継続できたのである。

「装甲の隙間を狙え！ そうでなければ足先か膝を狙って転がすのだ！」

「將軍に後れを取るな！」

絶望的な劣勢でありながらも望みを捨てず戦い続ける健気な兵の勇気を、スクルデは正しく称賛した。

「素敵、素敵よ。だからあなたたちに絶望をあげる！」

スクルデは蕩けるような微笑とともに高々と右手を上げ、勢いよく振り下ろす。

「蹂躪せよ！ 食らいつくせ！」

「御意！」

赤色獵兵団を包む赤い魔力の出力が上がった。

アースガルドの誇る魔導機械技術の結晶のひとつ、決戦兵器ヘルファイア。

魔導裝騎兵ケイオスが大型化して個別戦闘力と汎用性を高めたとするなら、小型化を追求して集団戦闘力に特化したのがこのヘルファイアであった。

人間がそのまま着装できるからこそ、普段の兵と変わらぬ動きができる。

それでいて攻撃力と防御力は十倍以上。ごく短時間の増幅なら、実に百倍にも達することが

可能だ。

「耐えろ！ 身体を張って耐えろ！」

ルクレールの絶叫もむなしく、戦況はまさしく一方的な虐殺となった。

こちらの攻撃は通じず、敵の槍は味方を容易く貫いていく。

それでも槍を身体で受け止め、仲間の死体を石垣代わりにしてルクレールたちは必死に耐え続けた。

ひたすら頼みの綱までの時間を稼ぐために。

「魔力充填完了！」

「座標固定！」

「増幅魔導全開！」

先ほどアルフォンスを撃退した時以上の魔力を練り上げ、待ちに待った魔導兵の詠唱が終わる。

「――撃て！」

「しかし將軍がまだ……」

「將軍ごと撃て！ それが、それが將軍のご意思なのだ」

「……そんな……」

最前線で複数の赤色獵兵団を相手にするルクレールの左手が、敵の槍を受け流し損ねて宙へ

飛んだ。

もう長くは持たない。

楽しそうに豪快に笑ってルクレールは味方を振り返った。

「いいから撃て！ この俺に男子の本懐を遂げさせろ！」

「――炎王の魔剣、撃てえええ！」

白熱の熱線が解き放たれた。

何の魔導防御もないイエルムガンド兵が、灼熱のエネルギーに呑み込まれていく。

全身を槍に貫かれながら、ルクレールは会心の笑みを浮かべて、眩い光が自分もろとも赤色獵兵団を包んでいくのを凝視した。

「イエルムガンド王国軍を舐めるな！」

「――もちろん、舐めたりしないわ」

喜悦の色とともにスクルデは嗤う。

光が薄れた瞬間、ルクレールを失い、前衛の兵士を失い、魔力のすべてを失ったイエルムガンド王国軍は絶句した。

そこにはわずかに数百程度の損害しか出さず、十分に戦力を保ったままの赤色獵兵団がいて、再び突撃を開始しようとしていたのだ。



そのころ、クラッツはこれ以上の手柄を集めることを忌避された結果、バシユタールへと帰還していた。

「今、バシユタールは王国でもっとも注目を浴びる土地であろうな！」

銜いのない笑みを浮かべて、ルナリアはクラッツの右手に自らの胸を押し当てる。

一夜を共にしてからというもの、これまでコーネリアに先行を許していた後れを取り戻そうとスキんシップに勤しんでいた。

「それにしても、本当にあの者たちでストラスブル侯を鎮圧できるものかな？」

小首を傾げてみせながらも、フリッガはちゃっかりクラッツの左側を占有していた。

武勇自慢の二人にガチで縄張りを主張されるといささか分の悪いコーネリアは、不機嫌そうにクラッツの対面に座っていた。

それでも陰悪な雰囲気にならないのは、自分こそがクラッツの初めての女性だという自負と、ルナリアやフリッガに対する信頼があるからだ。

性に関して手強すぎる吸精鬼の妖魔――トリアステラ、メルル、ベルタを相手にするには、今のところ三人が手を組んでもなお劣勢は否めなかった。